

『文化財と技術』

第8号

- 第一部 韓半島・日本列島の象嵌
- 崔基殷 製作技法分析からみた百済象嵌資料の系統とその解釈
- 鈴木勉 日本古代象嵌技術の起源と展開
- 林志暎 古代金属象嵌線の製作技法による分類の試み
- 鈴木勉・金跳咏 日本列島／韓半島出土・伝承象嵌遺物一覧（稿）について
日本列島出土・伝承象嵌遺物一覧（稿）
韓半島出土・伝承象嵌遺物一覧（三国時代）（稿）
- 第二部 古代東アジアの技術
- 崔基殷 武寧王陵出土装飾刀の製作技術と製作地
- 黒木英憲 金属工学からの提言 七支刀の製法について
- 河野一隆 九州国立博物館蔵の冠・冠帽前立について
- 于春・董亜巍・董子俊 唐代長安地区の小型金銅仏像および範鑄法による鑄造実験
——四脚座を中心として——
- 鈴木勉・金跳咏 東アジア金銅製獅嚙文帯金具の「埋け込み法」
公州水村里遺跡、長野県八丁鎧塚2号墳出土品について
- 鈴木勉 朝鮮半島三国時代の彫金技術
その20 全北高敞郡雅山面鳳德里古墳群1号墳出土飾履ふたたび
その21 毛彫りか？蹴り彫りか？
- 第三部 復元研究報告
- 丁眞 慶州皇吾洞34号3槨出土耳飾りの復元実験

『文化財と技術』第8号 目次

第一部 韓半島・日本列島の象嵌

- 製作技法分析からみた百済象嵌資料の系統とその解釈 崔基殷 5
- 日本古代象嵌技術の起源と展開 鈴木勉 18
- 古代金属象嵌線の製作技法による分類の試み 林志暎 54
- 日本列島／韓半島出土・伝承象嵌遺物一覧(稿)について 鈴木勉・金跳咏 66
日本列島出土・伝承象嵌遺物一覧(稿)
韓半島出土・伝承象嵌遺物一覧(三国時代)(稿)

第二部 古代東アジアの技術

- 武寧王陵出土装飾刀の製作技術と製作地 崔基殷 83
- 金属工学からの提言 七支刀の製法について 黒木英憲 110
- 九州国立博物館蔵の冠・冠帽前立について 河野一隆 113
- 唐代長安地区の小型金銅仏像および範鑄法による鑄造実験
——四脚座を中心として—— 于春・董亜巍・董子俊 121
- 東アジア金銅製獅嚙文帯金具の「埋け込み法」 鈴木勉・金跳咏 137
公州水村里遺蹟、長野県八丁鎧塚2号墳出土品について
- 朝鮮半島三国時代の彫金技術 鈴木勉 149
その20 全北高敞郡雅山面鳳德里古墳群1号墳出土飾履ふたたび
その21 毛彫りか？蹴り彫りか？

第三部 復元研究報告

- 慶州皇吾洞34号3槲出土耳飾りの復元実験 丁真 161

第二部 古代東アジアの技術

武寧王陵出土裝飾刀の製作技術と製作地	崔基殷	83
金属工学からの提言 七支刀の製法について	黒木英憲	110
九州国立博物館蔵の冠・冠帽前立について	河野一隆	113
唐代長安地区の小型金銅仏像および範鑄法による鑄造実験 —四脚座を中心として	于春・董亜巍・董子俊	121
東アジア金銅製獅嚙文帯金具の「埋け込み法」 公州水村里遺蹟、長野県八丁鎧塚2号墳出土品について	鈴木勉・金跳咏	137
朝鮮半島三国時代の彫金技術 その20～21	鈴木勉	149
その20 全北高敞郡雅山面鳳德里古墳群1号墳出土飾履ふたたび		149
その21 毛彫りか？蹴り彫りか？		155

九州国立博物館蔵の冠・冠帽前立について

河野 一隆

1. はじめに

九州国立博物館では平成 17 年 (2005) に「新羅古墳資料」と称される文化財を購入した (図 1)。内訳は、

a. 服飾具

①冠	金銅製		1 点
②冠帽前立	金銅製		1 点
③飾履	金銅製		1 足
④飾履破片	銅製		1 点

b. 馬具

⑤鞍橋	金銅製	前輪・後輪	各 1 点
⑥杏葉	金銅製	魚尾形	6 点
⑦杏葉	金銅製	楕円形飾板のみ	1 点
⑧杏葉	金銅製	棘葉形	3 点
⑨雲珠	金銅製		1 点
⑩辻金具	金銅製	鉢上に軸飾りあり	2 点
⑪辻金具	金銅製		4 点

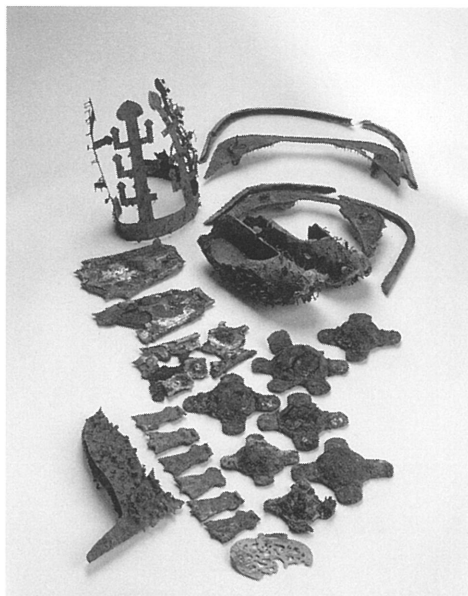







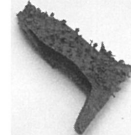


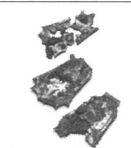


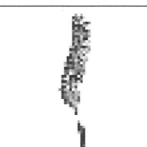
図 1 「新羅古墳資料」の全体 (修理前)

である。日本の博物館ではこのような収蔵品が少ないので折にふれて紹介してきたが、多岐的な分野にわたった館内の研究紀要という性格のため、考古学研究者の目に触れることも多くはなかった。そこで、この機会を得て、本資料群に含まれる服飾具が持つ意義と分析方法を再論して、改めてその系譜について私考したい。

なお本資料群は「新羅古墳」とされるけれども、「出」字形冠の存在からそのように称されるに過ぎない。しかも、金銅製で棘葉形や魚尾形の杏葉を含むことから、加耶も含めた新羅領域でも、王族級ではなく階層的に下位の首長層であることが想像された。旧所蔵者から出土地に関連した情報は得られなかった。このため、来歴を遡ることで出土情報に接近しようと試み、偶然、梅原考古資料カードに本資料群の一部が掲載されていることを知ることができ、本資料群の形成過程に大きな手がかりを得ることとなった (表 1)。

要点を纏めると本資料群の一部は、朝鮮大邱府南旭町で市田醫院を開設していた市田次郎氏が旧蔵していたようだ。彼は、南鮮合同電気社長であった小倉武之助氏と並び立つ朝鮮古美術コレクターとして良く知られた人物でもあった。彼の所蔵品を記録した梅原考古資料の調査カードには 182 件が記録され、三国時代に帰属するものが 97 件、それ以前の青銅器 (あるいは金石併用) 時代のものが 40 件、統一新羅時代以降のものが 55 件である。このうち、三国時代のものは鏡、鈴、玉類、環頭大刀、土偶、土器 (形象土器を含む)、調査記録などが含まれるが、本資料群に該当するもの

表1 「新羅古墳資料」の資料群形成過程 (河野 2011 より)

番号	資料名称	梅原考古資料写真	新羅藝術品 展覧会目録 (1929年)	梅原末治氏 資料調査時 (年不明)		九州国立博 物館収集時	九博収集時写真	資料群	
1	鞍橋金具(前輪・後輪)		○ (市田次郎氏)	○ (市田次郎氏)		○		I	
2	飾脊 A・B		○ (市田次郎氏)	○ (市田次郎氏)		○		脊A (I) 脊B (II)	
3	冠		×	×	冠・双翼形(長翼型)冠帽前立・辻金具・雲珠・杏葉(魚尾形・楕円形・棘葉形)加わる。	○		IV	
4	双翼形(長翼型)冠帽前立 A		×	×		○		IV	
5	辻金具・雲珠		×	×		○		雲珠(V) 辻金具 (IV・V)	
6	杏葉(魚尾形・楕円形)		×	×		○		IV	
7	杏葉(棘葉形)		×	×		○		V	
8	双翼形(短翼型)冠帽前立		○ (市田次郎氏)	○ (市田次郎氏)		コレクションから脱落。	×		I
9	双翼形(長翼型)冠帽前立 B		○ (市田次郎氏)	○ (市田次郎氏旧蔵)			×		II
10	単翼形冠帽前立		○ (市田次郎氏)	○ (市田次郎氏旧蔵)	×			III	

は鞍橋（前輪・後輪）と飾履のみであった。このカードには調査年月日は不明ながらも「市田次郎氏蔵」、「市田次郎氏旧蔵」が書き分けられており、カードに記録される前に市田氏がコレクションの一部を手放した可能性も想定される。以上をふまえつつ、この梅原考古資料のカード化がいつなされたかが年代の定点となるだろう。

有光教一氏の述懐（有光 2007、P120）によれば、この整理は 1953 年 9 月から 1956 年 12 月までの間、米国ロックフェラー財団の支援を受けて、京都大学文学部考古学研究室で有光教一氏・樋口隆康氏・西谷真治氏・田中（中野）しづ氏らによって推進された。この情報から、資料カードの作成期間は整理が開始された 1953 年以後、九博が購入した 2005 年までの間に絞り込むことができる。この間に市田次郎氏のコレクションの一部を核として、本資料群が形成されたのは疑いない。なお、市田次郎氏がかつて所蔵したコレクションは、1946 年 3 月 28 日の有光氏の日誌によれば香椎源太郎氏（釜山）・小倉武之助氏（大邱）らの所蔵品と共に慶州博物館（慶州分館）に摂取されたが「良品は抜かれたあとのようだ」と記されている。よく知られる通り、朝鮮半島から日本人退去にあつては物品持ちだしが手荷物程度に制限されていたため、以上の事情を勘案するなら本資料群の大半はすでに戦前・戦中に日本国内に一程度もたらされていたとみるのが妥当であろう。さらにこの本資料群にはもう一つの年代の定点がある。それは、昭和 4 年（1929）に朝鮮併合 10 周年を記念する朝鮮博覧会と連携して、9 月 15 日～11 月 3 日に大邱で開催された「新羅藝術品展覧会」である。この目録からは市田次郎氏所蔵コレクションの一部であった飾履、鞍橋金具が出陳されたことがうかがい知られる。この展覧会は、大日本帝国の国威発揚を背景に朝鮮各地の美術品はもとより考古資料も展示品として、各コレクターより出品されたようである。さらに、冠・冠帽前立および杏葉や雲珠・辻金具などの馬具類は、少なくとも梅原氏の調査以降にこの鞍橋金具・飾履に加わったと考えるのが自然だろう。

以上の分析から、九州国立博物館「新羅古墳資料」は、1929 年にすでに市田次郎氏コレクションに加わった鞍橋金具・飾履に加えて、大半が日本にもたらされ、1953 年から 2005 年にかけて徐々にコレクションが形成されたと見ることができるだろう。

2. 冠・冠帽前立の概要

それでは、本資料群のうち冠・冠帽前立について、詳細な分析を試みたい。この 2 点を選んだ理由は、歩揺の製作に着目することで、三国時代の服飾具の生産組織と系譜の一端を明らかにすることが出来ると考えられるからである。

冠（図 2） 金銅製で帯に立飾を持つ冠。鉢巻き状の狭帯の上に、正面には宝珠形装飾から下る軸に 3 段の直角に分岐する対照形の枝を持つ立飾が 3 本、その両側に 4 枝が斜めに分岐する鹿角形立飾各 1 本（計 2 本）が付けられる。所々に裁断時のミスがあり、かつ鉾の打ち方も一定間隔ではない。立飾は二重の刺突列点文でその輪郭を縁取り、表面には撚った針金で円形の歩揺を吊り下げている。立飾先端の宝珠形部分には一列の刺突列点で逆心葉形の文様を加飾されている。各立飾は 3 個の鉾で帯に固定される。左右の「出」字形立飾の下方に当たる帯の部分には耳飾を垂下するための小環が付けられている。歩揺の取り付け箇所は、針金で留めるための穿孔前に裏面から半球形にプレス（ポンチ）されている。帯は上下端を互いに平行する二線によって縁取られており、その間に鋸歯文を施す。平行線は裏面から、鋸歯文線は反対側から施されている。なお、立飾には裏面に有機質の痕跡が観察されるため、有機質の内冠の外側にこの冠が取り付けられたと推定される。冠全体の歩揺の取り付け数は 180 個であり、うち遺存している数は 170 個。帯の直径 27.9 cm で

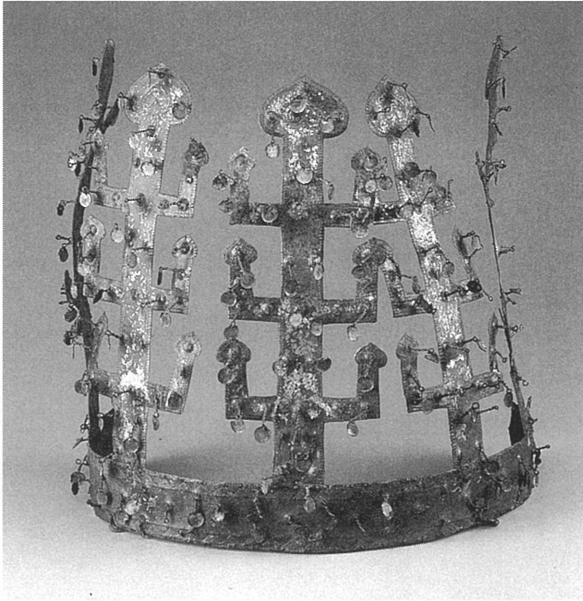


図2 冠の全形（修理後）

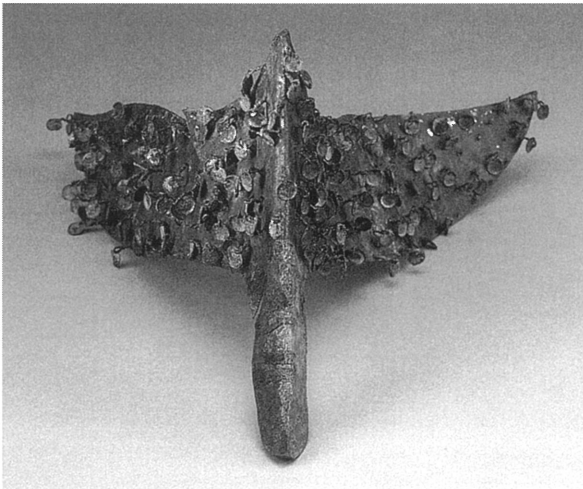


図3 冠帽前立（修理後）

幅は 3.9 cm、中央の立飾の高さ 27.6 cm、鹿形立飾の高さ 27.9～28.5 cmをはかる。

冠帽前立（図3） 金銅製で鳥が双翼を広げた形の冠帽の前立飾。灯火（トーチ）形の板金を中軸ラインで2つに折って長三角形とした金具を中心にすえ、その両側に角形に張り出す板金を3か所の頭径 2.5 mmの鉸によって固定している。本品も角形の裁断線がブレており、冠同様、作りが稚拙な印象を与える。この前立は本来、有機質の冠帽本体に基部を布巻きで固定するため、基部には布巻きの跡が遺存している。ただし冠とは異なって刺突列点文による加飾がなく、全体に簡素な感を与える。歩揺は二孔一対の孔に針金を通し、裏側で脚端を左右に折り曲げて留める。歩揺の取り付け数は 180 個、うち遺存している数は 170 個。前立飾の高さ 18.2 cm、双翼を広げた長さ約 57.5 cmをはかる。

3. 歩揺の分析

本資料群中の冠・冠帽前立の製作工程は、観察結果に基づいて、①鍍金、②罫描き、③裁断、④歩揺作成・取り付け、⑤整形、⑥仕上げの6段階を推定した。鍍金と裁断の前後関係については、素材となる板金にまず鍍金が施された後、裁断線だけでなく二重の列点による加飾や歩揺の取り付け位置の設定・穿孔についても罫描きされていた可能性が高い。その後には裁断。最後

に歩揺取り付け後に整形して製品の形が整えられ、有機質素材と組み合わせられて完成したのだろう。

この冠と冠帽前立を、歩揺の製作技法によって分析したい。まず、本体に固定する針金はどのように作られたのだろうか。一般に針金を作り出すためには、現在でも行われているような延伸用ダイスを使った「線引き法」と、鍛造後に研磨で仕上げる方法が想定される。たとえば奈良県藤ノ木古墳の場合は後者という（今津・鈴木・松林 1993 より）。それでは、古墳時代に延伸用ダイスは使用されていなかったのだろうか。福井県向山1号墳から出土した金製の長鎖式耳飾をマイクロフォーカスX線CTや電子顕微鏡によって観察した村上隆氏は、金線表面に線引きダイスで押し出された際に生じたと思われる細かい溝を発見している（村上 2003 年）。長鎖式耳飾は一点ごとの変異が大きく日本列島で製造された可能性が高いと言われており、この延伸用ダイスは日本で初めての技術（5世紀中葉）である。一方、藤ノ木古墳では鍛造後の研磨で製造されており、これは延伸用ダイスが定着しなかったためか、素材的な制約のためかは判然としない。それでは本資料群の冠・冠帽前立ではどうだろうか。

そこで、針金断面をデジタルマイクロスコープで観察すると、多角形（方形または三角形）で隔

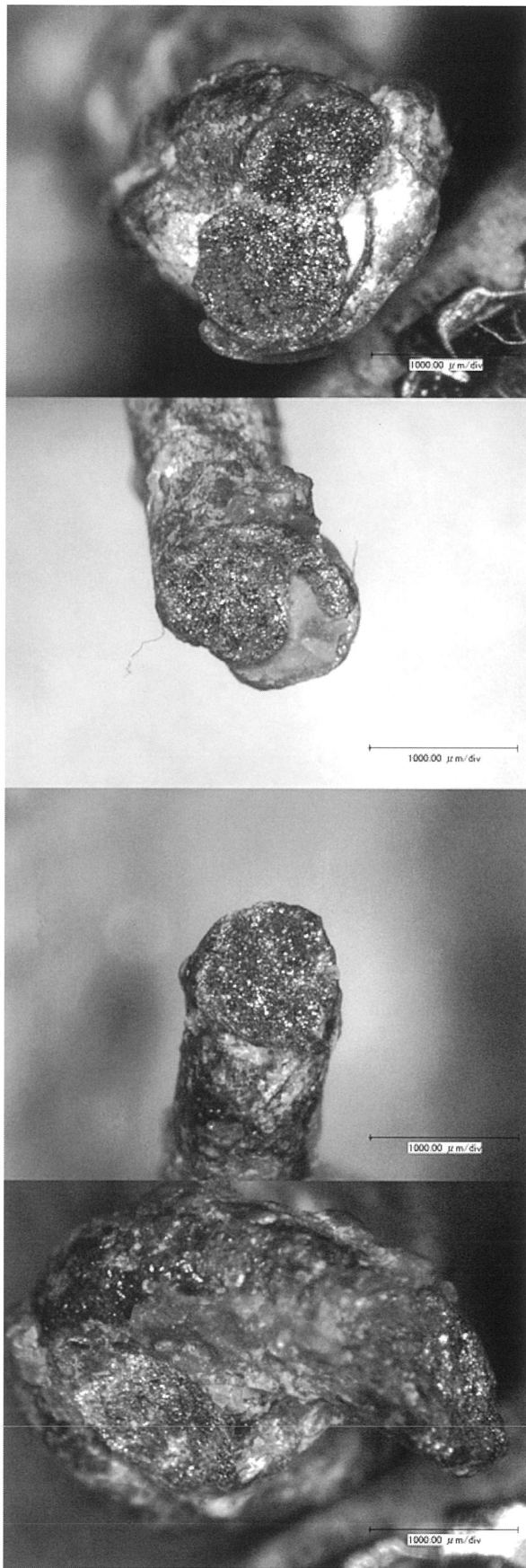


図4 歩揺の針金の断面

角が面取りされたものと、不整形に引き伸ばされたようなものと2種類に分かれるようである(図4)。残念ながら錆のために表面がはなはだしく荒れており、金製品で行なったような側面の電子顕微鏡観察は望むべくも無い。X線CTで断面画像を解析することで、ダイス使用の存否を検証しようとしたものの、この方法でも解像度が低く適わなかった。

そこで次に針金の製造方法ではなく、針金の撚り方から製作組織に迫ろうと試みた。針金の撚りは、垂飾が掛かる輪を手前に置いた時に、右側の針金が左側の上に来る右撚りと、左側の針金が右側の上に来る左撚りとに大別される。この理由は、輪を右に置いて、右手の親指を外側上方に右手の人差し指と中指とを手前側下方に同時に回転させると右撚りが、輪を左に置いて、左手で同じ動作をすると左撚りになる。要するに、右利きの人が撚ると右撚りが、左利きの人が撚ると左撚りができる。ただし、何らかの工具を使用したと仮定した場合、右手に工具を持ち手前側か外側のいずれかに回転させるかで左右いずれの撚りも可能である。さて、同一工人ならば、右利きにせよ左利きにせよ同一の撚りを作ると仮定するならば、何人が歩揺の作成に関与したかが推定されるだろう。そこで、帯、「出」字形立飾(中央・右側・左側)、鹿角形立飾(右側・左側)の、6部品について右撚りと左撚りの個数をカウントした。その結果、右撚り優位のものと同様に左撚りを一定程度含むものとに分かれることが判明した。かりに、冠を製造した工人が右利きだと仮定すると、後者の場合は歩揺の製作に左利き工人の手になるものが44%程度含まれていることになる。次に、右撚りと左撚りの各々について、撚りの回数をカウントして度数分布を見た。その結果、右撚りは3~5回、左撚りは5~7回の部分に集中する標準偏差の傾向が看取された(図5左)。以上から、冠製作には歩揺製作に複数人が関与したと判断できよう。以上の分析視角をふまえて、冠帽前立と飾履についてもカウントした。図示

したように、冠とは異なり針金の燃りと回数が右燃り3回および4回へと収斂する傾向が看取される(図5右)。これは製造に関わった工人が冠よりも少なく、右利きであったことを示唆するのではなかろうか。そうすると、冠と冠帽前立と製作に関与した工人の構成や数が異なっている。個人コレクションという資料群の性格上、冠と冠帽が本来のセットか否かの確証が得られないが、一括性が担保される資料群ならば製作組織を推定する手掛かりのひとつとなるだろう。本体と歩揺の製作者が同一だったのか、分業で進められたのか、飾履など歩揺を持つ他の製品と共に、分析を進めることによって、副葬品がどのように製作され、調達されたのかに迫ることができるとは違いない。

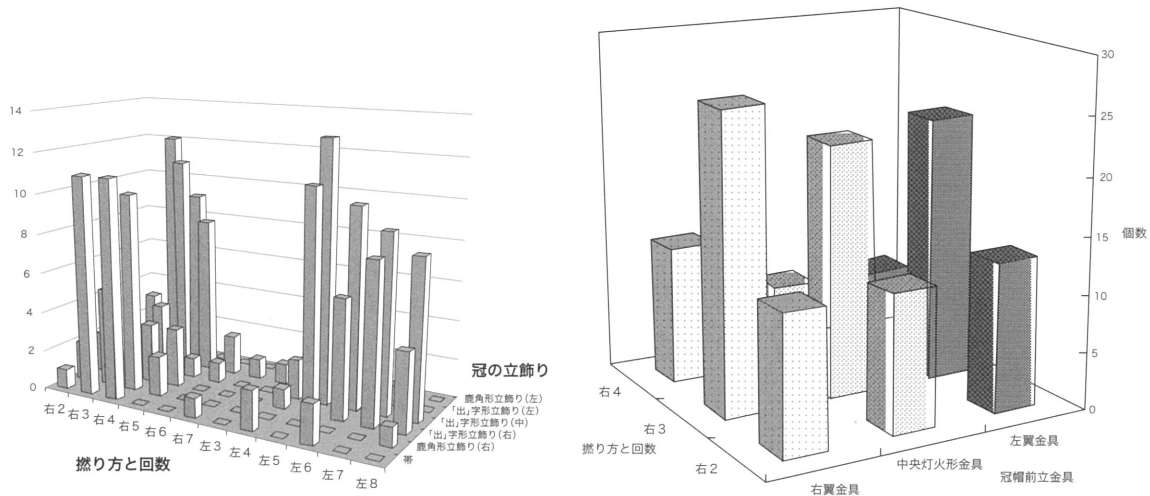


図5 燃りの回数の分布(左:冠 右:冠帽前立)

4. 樹木形冠の系譜

本資料群を構成する「出」字形冠と冠帽前立は、韓国の皇南大塚古墳や天馬塚古墳など慶州に所在する王家墓地からも出土し、新羅王家を象徴する冠飾とされている。しかし日本や百済の冠とは形態・系譜を異にし、本資料群のような「出」字形冠と冠帽前立の分布は、新羅の領域と新羅の影響下にあった加耶に限定される。それでは、このような冠の系譜はどのように考えられるのだろうか。この場合、注目されるのが新羅を特徴づける積石木槨墳である。これは、墓壙を掘って埋葬施設を築くものではなく、墳丘造成と埋葬施設の構築が同時に進行し、埋葬終了後に墳丘を盛り上げて完成する。以前から、このような埋葬手順は、ユーラシアに去来する遊牧民の墓、たとえばロシアのトゥヴァ共和国に所在するアルジャン古墳では地上に木材で井桁を組み、その中央部に木槨を築いて王と王妃を埋葬した後、積石を盛り上げて100mを越える墳丘を造成している。さらに、金製品への志向は遊牧系の特徴であり、ユーラシアステップの西端の黒海沿岸のスキタイ王族クルガンには、多くの金製品の副葬が知られており、大半はロシア皇帝コレクションとしてエルミタージュ美術館が保有している。そこで、「出」字形冠のような樹木をモチーフとした冠について、ユーラシアの類例を渉獵して系譜を絞り込んでみることにしたい。

まず、朝鮮半島の古代国家、百済では樹木形冠が全羅南道・新村里6号墳で出土している。この古墳出土の冠は、樹木形に切り取った金銅板に歩揺を取り付けた冠帽と組み合わせるもので、冠帽を取り去ったものが百済・武寧王陵に見られる。これは新羅の「出」字形冠と型式学的に大きく隔たっており、かりに新羅系と百済系と分けてみるならば、日本の古墳文化では新羅系が群馬県金冠塚古墳、百済系が島根県鷺ノ湯病院横穴に類例がある。日本の古墳時代の冠は広帯二山冠が主体である

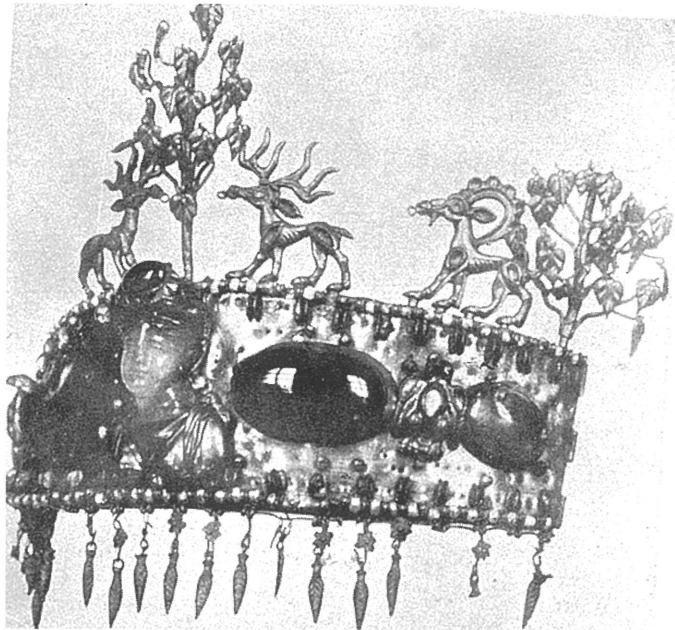


図6 ホフラチ古墳出土金製冠
(ロストフツェフ 1921 より転載)

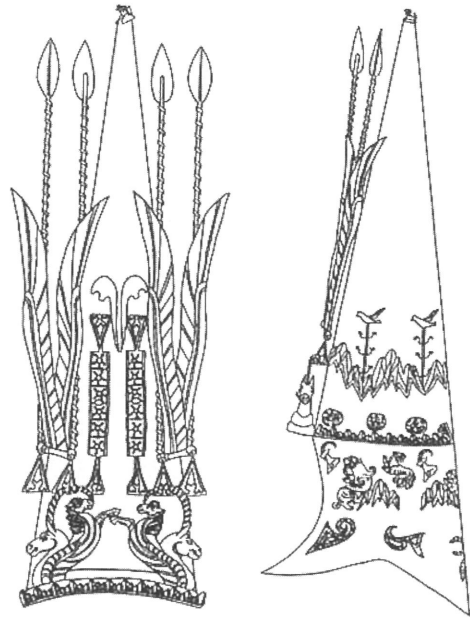


図7 イッシク古墳出土金製冠模式図

が、奈良県藤ノ木古墳の冠は伝統的な広帯二山冠に影絵式の樹木形装飾を付けたものが出土している。このような東アジアにおける百済系と新羅系の冠の2者は、さらに西方に広がるユーラシアの黄金冠に系譜が求められるようだ。

さて、その祖形となる候補として注目されるのが、アフガニスタンのティリヤ・テペ4・6号墓で出土した黄金冠である。ティリヤ・テペとは、アフガニスタン北方のバクトリア地方に去来した遊牧民が営んだ王族墓で、ここでは拝火教神殿が廃絶した後に6基の金製服飾具を副葬した木棺墓が築かれている。これらは紀元1世紀頃に築造され、この墓地で唯一の男性の埋葬墓である4号墓からは、頭部にムフロン羊と歩揺を取り付けた樹木形の立体的な頭部飾りが出土した。さらに、6号墓は細帯に影絵式の樹木形飾りを付けた金製冠であり、鳥が樹木に止まっている点も藤ノ木古墳例と共通する。さらに、4号墓と類似した立体樹木冠は、黒海沿岸のノボチェルカスクに所在するホフラチ古墳（エルミタージュ美術館蔵）や中国の北燕馮素弗墓や遼寧省ラマトン墓地に含まれる房身2号墓などで出土し、東西に広く波及している。一方、カザフスタンのイッシク古墳で出土した金製冠は、影絵型の樹木冠であり、側面には樹木の先端に鳥が止まっている点で、ティリヤ・テペ6号墓の金製冠と共通する意匠である。

こうして、ユーラシア各地に分布する樹木形金製冠には、表現方法が立体型と影絵型の2つの系譜があり、前者には羊や鹿の角などの動物に由来する形象が付属するのに対し、後者には鳥の形象が伴うと整理できそうである。これが男女差なのか、遊牧民の出自の差に由来するものかは定かではないが、新羅系と百済系という2種類の冠がユーラシアにまたがる樹木冠に、それぞれの系譜が求められることは、注目してよいだろう。つまり、「出」字形冠は動物由来の形象が付いた立体的な樹木冠が便化したもので、ティリヤ・テペ4号墓へ繋がるものと位置づけられよう。

ところで、このような樹木形装飾は金銅製冠への導入以前にも、鉄製冑に組み合せて日本古墳文化に流入した痕跡がある。たとえば、福岡県稲童21号墳から出土した金銅製樹木形装飾は、歩揺が付くもので樹木形冠の省略形とみなすこともできよう。この稲童21号墳例は、眉庇付冑の受鉢部分に樹立した形で飾られたと推定される。このような眉庇付冑に付属する金銅製樹木形冠飾は日

本独自のものであり、ただちに大陸の樹木形冠の影響を見て取ることは早計かもしれない。ただし、中期古墳から後期古墳への威儀具が甲冑から冠へと変遷する中で生み出された、過渡的な存在と見なすことも出来るだろう。

5. おわりに

本稿では、新羅古墳資料の紹介を目的として、伝来、概要、歩揺の分析、系譜の4項目について概述した。出土時の情報に欠ける個人コレクションは、どうしても美術的観点からの考察に止まりがちである。しかし、子細に見ることで型式学的分析に新たな視点を導入することが出来る。また、広域に系譜を求めることで、地域固有とされたものが、他地域との交流のあらわれとも見られることも分かった。資料を多様な視角から分析することで、引き出せる情報の範囲は大きく広がること示された。今後は、出土状況の確実な資料と対比することで、推論の蓋然性をいっそう高めていくことにしたい。

【参考文献】

- M. ロストフツェフ (坪井良平・榎本亀次郎訳) 『古代の南露西亞』 原書房 1921年
村上隆 「金製垂飾付耳飾の製作技術に関する新しい知見」 『奈良文化財研究所紀要 2003』 奈良文化財研究所 2003年
橿原考古学研究所編 『斑鳩 藤ノ木古墳 第2・3次調査報告書 分析と技術篇』 橿原考古学研究所 1993年
今津節生・鈴木勉・松林正徳 「六世紀古墳出土針金の製作技法について」 第15回古文化財科学研究会講演大会 1993年
宇野慎敏 「初期垂飾付耳飾の製作技法とその系譜」 『日本考古学』 第7号 日本考古学協会 1999年、45～46頁および第3図。
九州国立博物館・東京国立博物館・産経新聞社 『黄金のアフガニスタン—守りぬかれたシルクロードの至宝—』 産経新聞社 2016年
河野一隆 「館蔵「新羅古墳資料」の冠・冠帽と飾履—その伝来と製作技術を中心として—」 『東風西声』 第7号 九州国立博物館 2011年
有光教一 『朝鮮考古学七十五年』 昭和堂 2007年、P.120

文化財と技術 第8号

2017年7月28日 印刷

2017年7月28日 発行

編集 鈴木 勉
発行 特定非営利活動法人 工芸文化研究所
所長 鈴木 勉
発行所 特定非営利活動法人 工芸文化研究所
所長 鈴木 勉
東京都台東区根岸5-9-19 (〒110-0003)
印刷 千葉刑務所
千葉県千葉市若葉区貝塚町192 (〒264-8585)